オプション教材（きょうざい）ビワ　暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、**1**の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、**2**の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、**3**の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、１０回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
・４週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

1「案ずるより産むがやすし」という言葉がある。あれこれ考えているよりも、まずやってみようということだ。行動によって新たに切り開かれていくものも多い。やってみないことには何も始まらないというのは確かに真理である。2「めくら蛇におじず」ということわざもある。蛇という知識がないために、怖がらずに歩いていく。その結果、結局蛇は行動の妨げにならなかったということである。

3このように考えると、知識は経験の障害になると言える。むしろ、知識がない方が話は進みやすい。明治維新を担ったのは、地方の下級武士の若者たちだった。中央の権力の伝統という知識から自由であったために、大胆に日本の未来図を描けたのだ。4知識が乏しかったことが日本の未来を切り開いたのだと言ってもいい。

しかし、その明治維新を発展させたのは、欧米に視察に行った若者たちの新しい知識でもあった。知識のなさは、混迷する事態を打ち破るエネルギーではあったが、新しい見取り図を作るには、そのための知識が必要だった。5そう考えると、知識にもまた重要な役割があることがわかる。

だから、問題は、経験か知識かということではない。経験も、知識も、物事を実現するためのひとつの方法である。6目的に到達するための手段として経験と知識があるのだとしたら、大事なことはその手段ではなく目的の方である。「案ずるより産むがやすし」ということわざで問われているのは、どう産むかということではなく、何を産むかということなのである。

7鬼退治に行った桃太郎に従ったのは、犬と猿と雉だった。それぞれが象徴しているものは、犬は忠節、猿は知恵、雉は勇気だという説がある。だが、肝心なのは従者ではなく桃太郎自身である。8その桃太郎が象徴しているものこそ、鬼退治という行動の目的である。確かに、目的だけでは物事は成就しない。それなりの手段や方法が必要である。しかし、目的が明確でありさえすれば、それに応じた手段は必ず現れるのである。

9これを自分たちの人生に当てはめてみると次のようなことが言える。何かを勉強する場合、大事なのは、どういう勉強をするかという方法に対する知識である。そして、実際に勉強をするという行動である。どちらも同じように大切だ。0しかし、もっと大切なのは何のために勉強するのかという目的だ。その目的をまず確かなものにすることが最初にすべきことなのである。

（この長文は、最初の四段落でひとまとまりの構成になっています。）

（言葉の森長文作成委員会　M）

暗唱長文 中２ 8月　　河川は人間の

1 河川は人間の経験を豊かにする空間である。人間は、本質的に身体的存在であることによって、空間的経験を積むことができる。このような経験を積む空間を「身体空間」と呼ぼう。河川という空間は、「流れ」を経験できる身体空間である。

2 河川の体験は、流れる水と水のさまざまな様態の体験である。と同時に、身体的移動のなかでの風景体験である。河川の整備と河川を活かした都市の再構築ということであれば、流れる水の知覚とそこを移動する身体に出現する風景の多様な経験を可能にするような整備が必要だということである。

3 河川整備の意味は、河川の整備が同時に、河川に沿う道の整備でもあるという点に関わっている。場合によって、道は、水面に近いことも、あるいは水面よりもずいぶん高くなっていることもある。4 どちらにしても、ひとは歩道を歩きながら、川を体験し、また川の背景となっている都市の風景を体験し、そしてまた、そこを歩く自己の体験を意識する。

5 河川の体験とは、河川空間での自己の身体意識である。風景とはじつはそれぞれの身体に出現する空間の表情にほかならないからである。風景の意味はひとそれぞれによって異なっている。河川の空間が豊かな空間であるということは、何かが豊かに造られているから豊かだ、ということではない。6 とりわけて何もつくられていなくても、たとえば、ただ川に沿って道があり、川辺には草が生えていて、水鳥が遊び、魚が跳ねる。ということであっても、そのような風景の知覚がひとそれぞれに多様な経験を与える。7 体験の多様性の可能性が空間の豊かさである。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

豊かさの内容が固定化された概念によって捉えられると、その概念によって空間の再編が行われる。8 たとえば「親水護岸」は水に親しむという行為を可能にするように再編された空間であるから、空間を豊かにすることであるように思われるが、その空間は「水辺に下りる」「水辺を歩く」というコンセプトを実現する空間にすぎない。9 そこでひとは、たしかに水辺に下りること、水辺を歩くことはできるが、それ以外のことをする可能性は排除されてしまう。この排除は川という本来自然のものが概念という人工のものによって置換されるということを意味している。それは本来身体空間であるべきものが概念空間によって置換されている事態と捉えることができる。0

（桑子敏雄「風景の中の環境哲学」）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 人類の知性の賜物である科学と技術は人類に「豊かな生活」をもたらせてくれました。科学が人間自身によってつくられた学問であり、技術が明確な目的と経済観念を持つものである以上、科学と技術が人間に物質的繁栄と便利さに満ちた「豊かな生活」をもたらしたのは当然といえば当然です。

2 しかし、「豊かな生活」を享受する「現代文明人」に精神的病魔が襲いつつあることも、人類を含むすべての生きものの生存基盤であるこの地球環境が脅かされつつあることも、さまざまな社会的、自然的現象から明らかでしょう。3 人類も、地球も、どうして、そのような「病魔」に襲われなければならなかったのでしょうか。私は、その大きな理由の一つは、近年の「文科と理科の離反」ではないかと思っています。

4 私が敬愛する優れた物理学者であると同時に優れた文学者でもあった寺田寅彦（一八七八～一九三五、物理学者、随筆家、俳人）は、ある随筆の中で、科学と芸術はいずれも人間の創作であり、人間の感性と理性によって分析し総合して織り出された「文化の華」であるといっています。

5 ところが、「科学」と「芸術」という名称の対立のために、これらの二つの世界ははっきりと切り分けられて来たのです。この「科学」を「理系」、芸術を「文系」に置き換えても、話は同じです。6 「文系」の人は科学の方法も事実も知らなくてもなんら差し障りがないと考えられ、「理系」の人は芸術の世界に片足でさえも入れる必要がないと考えられたのです。まさに、このことが、意識的あるは無意識的な「文科と理科の離反」であり、それが、「病魔」の元凶であろう、と私は思います。

7 広く、地球と人類の健全な未来のために、これからは「文科と理科の融合」（「文理融合」）はもとより、「芸術」との融合（「文理芸融合」）が不可欠でありましょうし、これから、地球と人類が必要とするのは「文理芸融合」型人間でありましょう。

8 私は、経歴や仕事柄、世間的には「理科系の人」に入れられるのでしょうが、私自身は自分のことを「理科系の人」と意識したことがなく、「理科系」でもあり、「文科系」でもあり、さらには「芸術系」でもあると思っています。9 じつは、このようなことは、私に限らず、誰にとっても同じことなのです。「私」という個人の中には「理科系」の部分も「文科系」の部分も「芸術系」の部分も混在しているのです。0 さもなければ、この複雑な社会の中で生きて行けるはずがありませんし、人間的生活ができるはずがありません。要は、それぞれの「程度の差」なのです。

（志村史夫「文系？理系？」による。）